

戦国野火の女

大塚雅春



コンパクト・ブックス

戦国野火の女

大塚雅春



コンパクト・ブックス

集英社



戦国ロマンシリーズ・2

戦国野火の女

一九六六年七月一日 初版印刷
一九六六年七月十日 初版発行

定価二九〇円

◎著者 大塚雅春

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話 東京(265)六一一一

振替 東京一五六五三

刷所

株式会社美松堂印刷所

著者との了解により検
印を廃止いたします。

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

©1966

戦国野火の女

大塚雅春



コンパクト・ブックス

目次

雪の道……………	93	山娘の運命……………	189
白い谷間……………	84	対決……………	178
崩れゆく城……………	75	花落ちし……………	167
暗い山峡……………	65	風と雲……………	156
霧の夜の城……………	54	相似の人……………	144
姫ふたり……………	41	霧を行く姫……………	133
襲って来た男……………	27	水の上……………	123
姫と野盗……………	14	春の砦……………	111
青い実……………	5	暮雲赤雲……………	102

高い城壁……………	310
姫の逃走……………	296
落ち葉の道……………	284
女体本復……………	268
暗雲の下に……………	259
父と子……………	249
赤い湖面……………	237
春の旅……………	225
泥酔浪人……………	210
紋章……………	198

白い命……………	323
転落……………	332
運命の袖……………	345
赤雲去来……………	354

青い実

いくさが終末に近づいた時、はげしい春の風が渡つて来た。

見量山けんりやうざんから飛驒ひだの高原の上を、すさまじい風音を立てて吹き渡つて来た。

そんな風のなかを、何十人かの姉小路あねこうじの兵が藤馬とうまの兵を追つて高原の谷間を駆け抜けて行つた。

それらの兵の塊かたまりが、谷間の奥に消えて行つた時、木々きよう喬太郎はひとりゆっくり、かれらが踏み散らして行つたみどりの谷間に出て来た。

いくさは飛驒の姉小路と黒谷くろたにの藤馬とのあいだに戦われているが、木々喬太郎はそのいずれにも属していない。いくさからいくさを追ひ、獲物を求めてあるく野盗のひとりにすぎない。

「喬太郎……喬太郎……」

山の樹々のざわめきにまじつて、彼を呼ぶ同僚の次郎太の声が聞こえて来たが、喬太郎はただ、風をまともに受けて、ゆっくり谷間を奥へあるいて行つた。

ふところ手の袖がうしろに吹きあがり、カギ裂きになつた野袴ばかまがはためいている。

目は、はげしい風で半眼になつていた。そのどこか暗い、うつろな目が、樫かしの大樹の蔽おほいかぶさつた山手の一軒家をとらえた。さして、獲物をほしがっている目ではないが、習慣的にその家に近づいて行つた時、右手の藪から、「やッ」

と、槍の穂ほが突込んで来た。

わずかに、体をひらいて右半身に構えた喬太郎は、すでに右手に、ダラリと血刀をぶら下げていた。

彼の前にはひとりの雑兵が胴を割られてのめっている。どちらの兵ともわからない。

「バカナ」

血刀を下げたまま、家の土間にはいつて行つた。破れた炭俵が一つ土間の隅にころがっている。

板の間の隅に、手桶が一つあった。すでに、いくさを避けて逃げたあとの、ガランとした家のなかだった。

一つ、古いミノが板壁にぶら下がっているのを見つけると、やにわに、喬太郎はそれを斬り下げた。

それで、刀の血をぬぐつて、鞘かきにおさめたのだが、その時、コトリ、と板の間の隅の手桶がうごいた。うごいたように見えた。

喬太郎は近づいて行つた。

すると、手桶と板壁とのあいだに、ハツとするような目

をむけて、十七、八の女が屈み込んでいるのだ。

「この家のものか……」

女は、返事をせずに、切れ上がった大きな目で、喬太郎を睨んでいる。恐怖の眼差しではない。あきらかに、そのキラキラした目は、ありたけの憎しみを込めて喬太郎に投げつけているのだ。

「なぜ逃げなかったのだ」

「逃げることはない。あたしはこの家のものだ」

キンキンした声で女は言った。整った顔とは言えないが、その蒼ざめた頬からあごのむっちりした線に、固い美しさがあつた。

「家人は逃げただろう。こわくはないか」

すると、

「フン」

きらっと、その切れ上がった目に、また一層憎悪のこもった光が走った。

うしろの見量山の山腹のあたりで、急に喚声かんが湧きあがつた。

姉小路と藤馬の兵が衝突したらしい。

「名は何と言うぞ」

喬太郎は女にきいてみた。

「名はいえぬか」

たたみかけてきくと、

「お紺」

短く言つて、女はまたはげしい目のいろを、喬太郎に投げつけて来た。彼はいままで、こうして野盗を働くさいに、何人かの女に出会つて来たが、そのどれも、おびえ切つてろくにものもいえないものだった。

憎しみの目をはじめて見た。しかも、たかだか十七、八の小娘だ。

見ると、横坐りになつて板壁にくっついていて、木綿の着物の裾すそから、素足の足だけが白くのぞいている。

意外に、ほっそりしていた。

その足先から、お紺と言つたその女の顔に目を移した喬太郎は、空しい目のなかに急に狂暴なものを漂わせて行つた。

「俺は木々という野盗だ」

「フン、とるものはないわ。早く出てゆくがええわ」

「ある」

低い押しつける声で木々喬太郎は言つた。女——お紺はキツとしたさげすみの目で喬太郎を見た。

それを、いきなり横抱きにした。

「ああ、何をするっ」

手で突張ってくるのを、構わず、土間から裏口へ出て行

き、物置小屋を見つけると、戸を蹴破^くってお紺を投げ込むなり、

「それ！」

と、刀を走らせた。

「あっ」

ばらりと、お紺の細い帯が二つに離れて小屋のなかに落ちた。

帯だけでなく、木綿の着物もなかば斬り裂けて、からだの前があらわになっている。覗^{のぞ}いた乳房が、びっくりするほど張りをみせて盛り上がっていた。

「バカ！」

お紺は両手でしっかり、その胸を抱いて小屋のなかから喬太郎を睨^{にら}んだ。ガタガタ、歯が鳴っている。

「半分手伝ってやったのだ。脱げ！」

その時、高原を疾駆^{しゅうく}してゆく何騎かの蹄^{ひづめ}の音が聞こえて来た。まだいくさがつづいていらしい。

「脱げ。俺は野盗だ……とるものはとる」

喬太郎はそう低く言うと、押し倒して行った。

隅にあった二、三本の丸太が倒れ、薄板がバリバリ割れた。

「ああ、いやっ」

不意に、喬太郎は左の指先にはげしい疼痛^{いたう}をかんじた。

お紺がそれに歯を立てていた。

やっと、指を引き抜いた時、血が、タラタラ、お紺のゆがんだ顔の上にしたたたった。

喬太郎は暗い笑いをもらした。それから、まだお紺のからだにのこっている木綿の着物を、残忍に引きちぎって行った。

おどろくほどピチピチした肌だった。

「いやいや、いや！」

お紺はあばれていたが、

「うッ……」

と、突然、吸い込むようなうめきをもらした。女にとっではじめての衝撃が、その時お紺のからだを襲っていた。

それきり、お紺は何もいわず、抵抗もしなくなった。

木々喬太郎に抱かれたまま、目と口をかたくとじて、顔を必死で横にむけていた。無言の抵抗がその顔にあった。

「とるものをとった……」

渴いた声で、喬太郎は言った。

それでも、お紺は黙っていた。しばらくすると、喰いしぼった歯のあいだから、かすかなすすり泣きの声がもれはじめた。

——わあ……わあ……。

山腹のあたりで、再び喚声があがった。恐らく、姉小路

の兵の勝利の喚声であらう。

そのどよめく喚声と、小屋のなかのお紺の絶望的なすすり泣きとが、ひどく対照的に、喬太郎の暗い胸のなかを領してきた。

彼は、お紺というこの山娘が、好きでも嫌いでもなかった。犯しなかったから、犯したにすぎなかった。しいていえば、犯すことだけに、残忍なよろこびをかんじたのだといってもいい。

チチ——とどこかで子雀が短く鳴くのが聞こえた。

「名をいいなさい」

急に、泣き声をとめたお紺が言った。

喬太郎はカギ裂きになった野袴をつけながら、

「木々喬太郎……親もない、兄弟もない」

低く笑って、

「ものごころついて聞けば、俺は兵があらして行った家のなかでひとり泣きわめいておったらしいのだ。……恐らく、おやじもお袋も、兵に斬られたのだろう。それだけだ……」

お紺は、破れた着物をはだかの腰のあたりに強く押しあてて、

「な、なぜこんなことをした!」

「何となくな……」

ひとりごとのような声を残して、外へ出ようとした時、家の前あたりから、

「おーい、喬太郎……喬太郎、どこだァ!」

という、葛屋次郎太のせき込んだ声があった。それにつれて、何人かの乱れた足音が近づいて来た。

喬太郎が小屋の外へ出た時、前の一軒家の土間を走り抜けて、彼の目の前に次郎太の肥った体軀が飛び込んで来たのである。

「喬太郎、いかん! 姉小路の兵が追ってくるぞ」

「——」

喬太郎の目に冷たい光がやどった。そこへ、七、八名のものが槍だの刀だのをさげて走り込んで来て、

「やい、もう逃がさぬぞ。藤馬の兵と見たり!」

「ち、ちがう、俺たちはただの旅人だ」

次郎太があわてて言ったが、

「いうな、それ!」

姉小路の兵はいっせいに突込んで来た。血をみて来た兵の獲物を見つけた狂暴なものが、そこに湧き立っていた。

が、その途端、ほとんど眠いような目をした喬太郎の前で、ふたりの兵が悲鳴をあげて同時にのけぞって行った。

喬太郎は、相かわらず、あの右半身の構えで血刀をぶらりと下にさげ、その顔に、無言の笑いをたたえているので

あった。

ぞつとしたおびえのいろが、残った兵の顔にうかんだ。誰も突込んで来なくなった。

「野郎！」

と、次郎太だけがひとこと言った。

姉小路の兵は、何かひとこと言っただけで、喬太郎の前から退散して行った。

喬太郎は刀をおさめて、妙にうつろな目をして小屋の前をはなれてあるき出した。小屋のなかにまだいるはずのお紺は、コトリとも、音を立てない。

喬太郎はしかし、たつたいま犯したお紺のことには、何の感傷もいだいていなかった。ただひどくピチピチした肌と、そのいくらか切れ上がった目の憎悪にもえていたのが、こころのどこかに残っているだけだった。

「喬太郎、どこへ行く？」

「わからぬ——」

「またわからぬか。だいたいこないくさを追って来たのがいけなかったのだ。獲物など、何ひとつねえ」

「そうだろう、ねずみ一匹おらぬところだ」

「チェッ、きょうも運がつかめねえのか」

次郎太は舌打ちして、喬太郎のあとからついて行きはじめた。——これまで、次郎太は何年かこの木々喬太郎と

もに野盜をはたらいて来たが、それらの、いかなる時でも、うまい汁はかならずといていいほど喬太郎にさらわれて来た。

それでいて、次郎太はいつもこうして喬太郎のあとをついて行く。

どこで習ったのか、喬太郎は不思議な剣の冴えをもっていた。次郎太は誰かに襲われるたびに、喬太郎がほとんど静止しているように、刀をぶら下げて立っている姿を見るのだ。

そのたびに、喬太郎は、何人かの敵をかならず斬っていた。その剣の背後におりさえすれば、次郎太の身は安全であつたのだ。

ふたりは見量山の山裾すそを西にまわって、新田の山にはいつて行った。見量山とちがつて樹はまばらだが、急坂である。

その石ころの多い急坂をのぼりはじめた時、

「おっ？」

と、次郎太が背後を振り返って言った。

「別嬪べっぴんがついて来るぞ、喬太郎」

「別嬪？」

喬太郎は振り返って、五、六間あとにあのお紺がこちらを見つめて立っているのを見た。

いつ着物を着かえたのか、縞模様の木綿の着物を着て、妙に肩を張ってこちらを見上げてゐるのだ。

風で髪が吹きあがっている顔が、夕暮れのせい、ひとく蒼白かった。

「あいつは、どこまでもついて来るだろう……」

喬太郎がつぶやくと、

「何でついて来るのだ」

「怒ってるからな。仕返しだ」

「怒ってる？ 俺たちにか！」

「そうらしい」

「馬鹿くさい。きょうは何もとらなかったぞ」

「そりゃあそうだろう。手ぶらだからな」

低く笑って、喬太郎があるきかけると、

「よし、俺はあいつを押えつけてやる。邪魔をするな」

「よせ！」

と、喬太郎が立ちどまって言った。背は、見せたままだが、その背中に殺気のような寒気がただよっていた。

思わず次郎太は顔をなでて、

「よすか。あいつをものにしたところで、運はつかねえ。

……しかし、ちょっと別嬪だな」

「……」

喬太郎は何を考えているのか、まだ背を見せたまま立ち

どまっていた。

樹々のざわめきのなかに、そうして背を見せて立っている木々喬太郎の姿を見ると、次郎太はいつもある恐怖をかんじる。

次の瞬間、何を言い出すか、何を仕出かすかわからないものを喬太郎はもっていた。

すると、喬太郎はわずかに右手に顔をむけたかと思うと、

「誰だ——」

と、低いが鋭い声をあびせかけた。

突然、右手の折れまがった松の向こうから、とてつもなく太い笑い声がはね返って来た。

そこに、鹿毛の馬にまたがり、赤陣羽織を着たいかにも頑健^{けんけん}そうなひとりの武将がいた。

彼は高笑いをしたあと、ゆっくり、馬を近づけて来ながら、

「わしは黒谷の藤馬権六よ」

「おお、これはこれは、黒谷の城主さまですかい」

と、次郎太はあわてて三回ほど頭を下げた。

「どうだ、わしの部下にはならぬか」

「ヘーッ、ほ、ほんとですかい！ ありがたき仕合せにござります」

「お前ではない」

権六はあごをしゃくって、

「そちらの言わぬ男よ。見たぞ」と言った。

「な、何をですか」

また、次郎太が問い返した。

「あの小屋の前だ。見事な腕前じゃ。その腕にホレたのじや、いや、その腕に一つたのみたいことがあってな」

「何をでござりまするか」

次郎太はまたせき込んでいた。だしぬけに運が向いて来たおもいで、顔中を上気させていた。

「姉小路の姫——ひとり娘を知っておるか」

「へい、天下の美姫とか、ひ、ひと目見てみたいものと思つておりますが」

「ふむ」

権六はその時、ちらっと、喬太郎のうしろに近づいていとお紺に光った目を投げて、

「女には縁があるものと見えるのう。とにかくわしの頼みを果たしてくれば、そのほうに家来三十人は与えよう」

「三十人？」

べったり、次郎太は土下座してしまった。そして、ついに、一言も言わず背を見せて歩きかけた喬太郎を見て、飛び寄って行き、

「土下座……土下座」

そう慄えてささやいた。

「土下座することはない……」

「いかん、家来三十人じゃ」

「そんなものはいらぬ」

「へへへ……」

次郎太は慄えながら、藤馬権六のカン骨の飛び出た顔を見て、急いであいそ笑いをした。

「どうじゃ、一応わしの城まで来るか」

「城までは行つてもよい……」

はじめて、喬太郎が権六にむかつて低く言った。

「頼みは何だ」

「まあ待て、話は城へ入ってからじゃ」

そんな藤馬権六の頼みを、木々喬太郎は果たす興味はさしてなかった。むしろ、城へ行きたいとも思っていないかった。

が、彼は彼の背後で、しつように憤怒の目をむけつづけているお紺が少々うるさかった。

ひとまず城壁というもので遠ざけない以上、このお紺はどこまでもついて来そうな気がしたのである。

事実、お紺は、木々喬太郎以外の人物には、一度も目をくれなかった。喬太郎だけを、あのいくらか切れ上がった

目で見つめつけているのである。

そんな顔は、まだ子供っぽい、変に一途なところがあつた。固いつぼみのまま、喬太郎にムリヤリ踏みやぶられた狼狽といかりで、無意識のうちに彼のあとをつけているかんじであつた。

「これか？」

いきなり、藤馬権六は馬上から小指を喬太郎のほうへ突き出してお紺のほうを見た。それから、しきりに高笑いをあげ、

「ムリもない、ムリもない」

そんなことを言つて、また笑い出した。

この黒谷の豪族は、八字ひげをゆすつて笑うことだけに興味をいだいているようであつた。

まもなく、新田の山腹に出て、数十名の家臣が追つて来た時も、風の吹きつける山々にむかつて、とてつもない高笑いを投げとばした。

かれらが、十数里の山道を通つて、黒谷の城に着いたのは、翌日の日暮れちかくであつた。

この豪放ともずるいとも思える頭目をむかえて、城内では、

「ようさ、お戻りじゃあ……お戻りじゃあ」
と、奇妙な歓迎の叫びをあげはじめた。

城内のものも、戻つて来たものも、いくさに負けたことなど、屁とも思っていないようである。

ところが、城門にお紺を大きな手をあげて押しとどめ、城内にはいった藤馬権六は、急に笑い顔を引込め、喬太郎と次郎太を、じろつと振り返るなり、

「両名は、飛驒の姫を奪つて来い」

だしぬけにそう言った。

権六の背後には、野盜まがいの武士が二十名ばかり控えている。

まわりの城壁は、部厚い高い板壁になっていた。

そして、中央に櫓やぐらが一つあるだけで、大岩と大岩とのあいだに、変に細長い建物が奥のほうへつづいていた。

「姫？ 姉小路の姫でござりますな！」

次郎太が、あわてて土下座してきいた。

「天下の美姫よ。わしの息き、不二ふじ郎ろうも、行きたがつておるが、藤馬の息が奪いに行くには、ちくともつたいないからかう」

権六はそんな言い方をした。ニコリともしなかった。

次郎太は膝をすすめて、

「姫を奪えば、たしかに家来三十人を……」

「二言はないわ。果たせばふたりに三十人ずつじゃ」

「ま、まことに」

次郎太は、顔から汗をしたたらせて、這いつくばうようにした。ここ何年か、搦（つか）もうとしてつかめなかった運が、ついにこちらに顔を見せて来たのだ。

彼は、頭を下げたまま、ブルブルふるえ出し、横目で喬太郎を見た。

喬太郎はもの憂い目を放ったまま、夕暮れてきた空のむこうを見ている。何を見ているのか、わからない暗い目のいろだった。

「いかん、頭を下げよ。ハハ、いや、喬太郎ともども、その大役、かならず仕遂（しと）げてお目にかけますわい」

次郎太は顔の汗をふいて言った。

「とにかく、姉小路の姫を奪って来い。相手は古くからの飛驒（ひし）の国司としていばりくさつとる。いくらいくさを仕かけても、この通りわしは負けてばかりよ。しかし、その姫を奪えば勝つ方法はある」

権六はぬけぬけとそんなことを言って、

「善は急げぞ」

「なるほど、善は急げですな」

次郎太はおうむ返しに言って、立ち上がった。彼はしたたる汗をまた手でこすって、ひとりで興奮していた。

たしかに、姫を奪えば家来三十人を与えられるとは、野盗の次郎太にとっては、またとない運にちがひなかった。

小判が当座の費用として何枚か渡され、姉小路の姫——名ははっきりしないらしいのだが、とにかくすごい別嬪（べっぴん）だという姫の様子もきかされた。

権六はこうした信頼のし方で、うまく人を引きつけていたが、この時もふたりにあけすけに事情を打ちあけて頼み込んだ。

次郎太はいよいよ興奮し、

「善は急がんといいよ興奮し、急がんと」

そんなことをつぶやいて、いまにも、ずばりと反対の言葉を吐きそうな喬太郎の手を引張るようにして、城門の外に出て行った。

外はすでに、うす暗くなっている。

「これでどうやら、俺もお前と離れてひとり立ちが出来そうだわい」

次郎太はあるきながら言った。

「ながいあいだお前のかげで、ウダツは上がらなかった。しかし、これで俺も侍大將（さむらい）よ」

それから、次郎太は喬太郎を横目でにらんで、

「この仕事がいやとは言うまいな。いままで一緒に野盗をはたらいて来て、いやとは言えまい。何しろ、こんどは家来三十人だからな」

喬太郎がいやだということだけが、次郎太は不安だっ

た。喬太郎の剣に期待しない以上、次郎太ひとりでは何の成算もないのだった。

すると、喬太郎は不意に道を横にそれてあるき出し、

「やっぱりお紺はいたな……」

そう低くつぶやいた。

見ると、うす暗い道の向こうに、あの女が立っているのだ。女に追われて、不機嫌になる喬太郎も喬太郎だが、女も女だと次郎太は思った。

この二日間、始終喬太郎のあとをつけながら、まだひとことも口をひらかない女だ。妙にまっすぐ立ってこちらを見ていた。

「あいつを木に縛しばっとけ」

「何！」

「邪魔になる」

喬太郎は背を見せたままひとこと言った。

そういわれれば、たしかに邪魔にちがいはなかった。姉小路の姫を奪う段に、あんな女にくつつかれていては仕事にならぬ。

「仕方がない、お前の命令だからな」

次郎太は肥ったからだを方向転換させて、お紺のほうへ近づいて行くと、

「木々喬太郎の言いつけだ。ただ縛るのはもったいない

が……わるく思うな」

不意におどりかかって行つた。女にかけては意外にすばしこい動きをもっていた。

「ちくしょう！」

お紺の口から、はじめて小さい叫び声がおこった。お紺は縛られながら、風に吹かれてひとり遠ざかってゆく喬太郎の暗い背を見た。何の関心もしめていない、冷たい喬太郎の後ろ姿だった。

姫と野盜

喬太郎と次郎太は、昼でもうす暗い見量山けんりやうやまの深いしげみのなかにひそんでいた。

そこから飛驒ひでたか高山たかやまの姉小路あねこうじの白い城壁が見える。その城壁から、しばらく雑木の斜面がつづいていて、そのはずれから見量山の山裾さもとにそって狭い谷あいがある。

「よく寝る奴だな」

葛屋次郎太くわやじらうたはいらいした口調で言った。

見量山にひそんでもうかれこれ一ト月ちかくなるが、喬太郎は、いちども姉小路の城や谷あいを監視したことはない。

小さい風呂敷包を枕に、一日中寝ころんでいるのだ。